

南部藩時代に武家の間で衣類などの図柄として用いられていた「南部古代型染」。染元の小野染彩所では、南部家の家紋である向鶴を菱状に紋様化した「向鶴菱紋」や、海岸を群れで飛ぶ千鳥の美しさを表現した「千羽千鳥」など、130種にものぼる模様の型が、400年以上の時を経た今でも色褪せることなく受け継がれている。

型染の工程は、熟練の職人たちによって、きめ細やかな作業が行われる。まず、デザインの型紙を切り抜いて模様を作る「型彫り」から始まる。柄の1つ1つを小刀で丁寧に削っていく根気強さが必要な作業だ。次に、生地に型紙をのせ印捺する「糊置き」、「染色」へと続いていく。その後、「水洗」、「乾燥」、「縫製」と、5日間以上の時間をかけてやっと完成となる。手を抜くことのできない慎重な作業が続く中で、染色後水洗いして糊を落とし、柄を確認する瞬間が、職人にとって最も感激の時なのだという。

「南部古代型染」は現在、着物はもちろんのこと、暖簾やテーブルセンター、手提袋などとして利用されている。珍しいところではカード入れやショルダーバックにも応用され、全部合わせると100種近くに及ぶという。



もり  
おか  
ブランド  
物語

南部  
紫根染  
南部  
古代型染

また、「南部紫根染」も古くから伝わる技法の1つだ。型を付けた後、それに沿って糸で縫い、絞り上げることから、「南部しぼり」とも呼ばれている。糸で絞った部分に染液が染み込まず、白く残ることで柄をつくっていく。

この技法を盛岡で唯一伝えているのが、紺屋町にある「草紫堂」だ。こちらでは、染料となる南部ムラサキの栽培にも取り組んでおり、地産地消の染物づくりが行われている。

伝統を継承し、職人の手によって生み出される「南部古代型染」と「南部紫根染」。どちらの着物も、箆笥などで寝かせれば寝かせるほど、色が落ち着き、味わい深くなるのだという。そのため、2代に渡って着用する愛好者もいるようだ。

新デザインの衣料を、次から次へと低価格で提供していく「ファストファッション」なるスタイルが流行している昨今。それとは逆に、年月を経るほど味わいを増す「南部古代型染」と「南部紫根染」の素晴らしさを、盛岡に暮らす人たちには特に知ってほしいと思ってしまう。

**盛岡特産品ブランド認証委員会**

〒020-0055 岩手県盛岡市繫字尾入野 64-102  
代表電話 019-689-2201 ファックス 019-689-2212